

相談援助実習におけるOSCE(客観的臨床能力試験)の開発 : 実施結果と学生アンケート調査から

著者	巻 康弘, 川勾 亜紀奈, 福間 麻紀, 近藤 尚也, 大友 芳恵, 鈴木 幸雄
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
号	21
ページ	1-11
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00010277/

<論文>

相談援助実習におけるOSCE（客観的臨床能力試験）の開発 ～実施結果と学生アンケート調査から～

巻 康 弘* 川 勾 亜紀奈* 福 間 麻 紀*
近 藤 尚 也* 大 友 芳 恵* 鈴 木 幸 雄*

抄 録：本研究では、相談援助実習におけるOSCE（Objective Structured Clinical Examination:客観的臨床能力試験）を開発し、その実施結果と学生アンケート調査結果を踏まえ、より効果的なOSCEを開発する上での検討課題を明らかにすることを目的とした。OSCEの試験項目（ブース）は、インテーク面接（Aブース）、アセスメント報告（Bブース）、実習日誌記載・提出（Cブース）とし、合格基準を3ブース合計の6割とした。

相談援助実習（本学の科目名：ソーシャルワーク実習）を控えた学生75名に実施したOSCEの結果は、本試験の平均点が123.9点（得点率80.4%）であった。また、再試験も含め74名が基準を達成した。

学生アンケート調査結果では、9割以上の学生がOSCEの目的を理解した上で試験に臨んでおり、OSCEの形式でスキルが測られることを有効であると肯定的に捉えていた。

本研究でのOSCE開発により、相談援助実習前に必要である技術の項目と水準について、一定の基準を明らかにすることが出来、学生や実習施設・機関に示すことを可能とした。さらに、OSCE実施により、学生が自身の「実力」を確認するというスクリーニング機能に留まらない、学習意欲を高める教育方法としての活用の可能性も示唆された。一方で、より効果的なOSCEを開発する上で、OSCEの難易度、試験項目、課題設計、評価者体制と評価に関する検討課題が明らかとなった。

Key Word：OSCE 相談援助実習 実習前評価システム 実践力 社会福祉士養成教育

1. はじめに

社会福祉士は、多様化する相談援助業務の拡大を踏まえ、資質向上を図る観点から2007年に「社会福祉士及び介護福祉士法（以下、社会福祉士法）」が改正され、カリキュラム内容もより高度な実践力養成を志向したものに改正された。

この社会福祉士養成教育において、より高度な実践力を志向する教育を行おうとしたとき、学生が実際の現場に触れる機会となる相談援助実習は、これまで以上に重要な位置を占めるものとなる。この相談援助実習において、より高度な実践力養成を行おうとするならば、学生が、社会福祉実践の三要素である「価値・知識・技術」を出来る限り事前に身につけ、実習場面で試行的にでも社会福祉実践に取り組むことが望まれる。

さらに、今回のカリキュラム改正においては、技術・技能の習得も相談援助実習の重要な達成目標のひとつとなっており、こうした技術・技能の獲得を行う上でも、実習指導者の業務同行や業務観察等の実習体験に加え、試行的にでも実習生自身が実施するという体験をプログラム化した臨床参加型実習の展開が望まれる。

臨床参加型実習は、実習生が利用者と直接的・間接的に接することが求められる。しかし、この求めは実習受入施設・機関や利用者からすると、大きな不利益をもたらす可能性も否定できないプログラムでもある。

このような観点を踏まえ、養成校からの委託教育である相談援助実習において、実習施設・機関に実習生の試行体験を要請しようとするならば、学生に一定の能力が備わっていることを実習施設・機関に示すことが条件となるであろう。また、この一定の能力を保証する為には、相談援助実習前の技術・技能を客観的に評価することが重要である。しかし、現在のところ社会福祉分野に

*北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

においては、こうした技術・技能を評価する一般化された方法は確立されていない。

臨床能力を客観的に評価する方法として、OSCEがある。このOSCEは1975年にHardenらによって開発され、伴ら（1994）が日本に紹介し、現在では医師及び歯科医師養成で共用試験が行われ、薬学、看護等の医療分野で普及しているものである。しかし、社会福祉分野での本格的導入には至っていない。OSCEに関する社会福祉分野での取り組みには、久能ら（2009）の研究や北海道ブロック社会福祉実習研究協議会（以下、北海道ブロック）（2011）の取り組みがあるものの全国的な導入には至っていないのが現状である。

久能ら（2009）は、OSCE試行結果を踏まえ、「実習前に最低限体得すべき技術がより明確化された」、「知識と技術と価値がどのように現場で要求されているのか、最終的にはOSCEを目標にして繋がることが示された点」が成果であると述べている。一方で、実習前に何を評価するのかという「OSCEの前提となる理念とビジョン」、教育における「OSCEの位置付けの在り方」、「評価表」の検討、「ブース間の評価の差」、インテーク面接以外の「課題作り」などの課題を指摘している。

また、先行実施している医療分野のOSCE開発では、医学教育で導入した伴（1995：161-162）や、言語聴覚士養成教育における阿部ら（2005）等が、「試験項目」、「試験時間と課題設計」、「模擬患者・評価者体制と人員の確保」、「模擬患者の演技の標準化」、「評価者の標準化」等を課題としている。

今回われわれは、これらの先行事例を踏まえ、相談援助実習に参入する前の実習遂行能力を測る方法としてOSCEを開発した。また、OSCE実施にあたっては、関係者全員の共通認識を生む為のOSCEマニュアルを作成し、事前打ち合わせ並びに模擬評価を実施した。

本研究では、今回開発した相談援助実習におけるOSCEの概要、OSCEの実施結果、学生アンケート調査結果を踏まえ、より効果的なOSCEを開発する上での検討課題を明らかにしたので、ここに報告する。

2. 相談援助実習のねらい

厚生労働省が示すシラバスの内容には、相談援助実習のねらいとして以下の点が示されており、「実践的な技術等の体得」や「技能の習得」が明記されている。

＜ねらい＞

- ・相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実践的に理解し実践的な技術等を体得する。
- ・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自

己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。

- ・関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する。

3. 実習前評価システムとOSCE

本学OSCEは、相談援助実習前の実習前評価システムの一環として位置付けている。この実習前評価について、社団法人日本社会福祉士養成校協会（2009：199-201）では、「①履修要件、②出席状況、③授業態度、④提出物管理、⑤身体・精神状況の把握と配慮、⑥定期的な知識試験」を実習前評価項目として取り上げている。各大学の実施状況について渡辺（2013）は、「実習が学科の必須科目となっているところもあれば、OSCE、CBT（Computer Based Testing：コンピューターを用いた知識の客観試験）の検討や、スクリーニングテストを課している大学もあるが、その取り組みは多様」と実習前評価の実態を述べている。

こうした実習前評価システムについて、北海道ブロック（2011：126）では、「相談援助実習に実習生として参入するための事前に満たすべき条件を充足しているかどうかを事前に評価し、充足していなければ一定の期間を与えて充足する機会を設定し、それによって実習への参入を許可するシステム」と位置付け、「前提科目」「OSCE」「CBT」を主要要素とし、2009年からの試行を経て2012年から各校での実習前評価システム施行を申し合わせている。

本学の実習前評価システムは、この北海道ブロックでの申し合わせに基づき試行・施行しており、「出席状況」「OSCE」「CBT」「期間内提出物」を構成要素とし、これらの構成要素の基準を全て満たした場合に実習配属することとなる。前提科目は、本学のカリキュラム構成上、ソーシャルワーク実習履修段階では、当該年度までに開講される社会福祉士受験資格取得に必要な科目を履修済みないしは履修中となるため構成要素に位置づけていない。各構成要素の詳細は以下の通りである。

出席状況は、実習指導における全体指導とグループ指導を各々7割以上出席していることを要件としている。

また、CBTは、北海道ブロック実習コンピテンス・アセスメントを基に北海道ブロックが作成した「北海道ブロックCBT問題集」から50問を出題し、6割以上の得点を合格基準としている。

さらに、期間内提出物は、実習計画書、実習自己コンピテンス・アセスメント、欠席者課題、OSCEで提出を義務付けている実習日誌などの提出物を全て提出することを要件としている。なお、OSCEについては後述する。

OSCE・CBT結果が基準を満たさない場合は、再学習の上で再試験を実施し、基準達成を目指すこととしている。しかし、再試験においても基準に達成しない場合は、実習配属を行わない。

そして、これらの評価は、7月上旬に開催する教員、実習指導者、学生による「実習担当者打ち合わせ会」の前までに行うこととしている。

4. 方法

本学臨床福祉学科社会福祉実習委員会において、実習前評価システムの企画・評価を担当する「社会福祉実習評価運営委員会」の下部組織であるOSCEワーキングチームが中心となりOSCE開発を行った。

開発にあたっては、全60頁の「実習前評価システムOSCE実施マニュアル（以下、マニュアル）」、インテーク面接に用いるクライアント役の性別毎に各3頁の「インテーク面接（Aブース）事例」、アセスメント報告に用いる全22頁の「アセスメント報告（Bブース）事例集（以下、事例集）」を作成した。

マニュアルには、北海道ブロックにおける実習前評価システムに関する事項、本学実習評価及び実習前評価システムに関する事項、OSCEの目的や位置づけ、合格基準と評価段階についての考え方、各試験項目の目的と概要（設定を含んだ指示内容、評価チェックリスト、評価上のポイントなど）、実施・運営上の留意点（スケジュール、各ブース及び送り出し運営手順など）、運営準備スケジュールなどを盛り込んだ。また、事例作成は、外部評価者が原案を作成し、OSCEワーキングチームにより完成させた。また、評価表の各評価項目の評価基準を示す評価上のポイントと評価段階の持つ水準の考え方は、繰り返しシミュレーションを行い整理した。

5. 対象

本学看護福祉学部臨床福祉学科において、相談援助実習にあたる「ソーシャルワーク実習」を履修している学生75名（3年次72名、4年次3名）を対象とした。

6. OSCE開発にあたっての視点

相談援助実習におけるOSCE開発にあたっては、相談援助実習が、ジェネラリスト・ソーシャルワーカー養成を目指す教育であることを念頭におき、どの分野で実習を行う学生も有すべき技術の測定を行うという視点で開発した。

試験項目は、北海道ブロックの「実習コンピテンス・

アセスメント」と、厚生労働省から示された「相談援助実習のねらいと含まれるべき事項」に基づく実習評価表の技術・技能に関する項目から設定した。

こうした視点を踏まえ、先の久能ら（2009）や北海道ブロック（2011）における「インテーク面接」「アセスメント報告」の2つの試験項目に改良を加え、さらに事例開発を行うとともに、「実習日誌記載・提出」を加えた3つの試験項目によるOSCEを開発した。

また、試験項目の目的、設定、試験時間、評価項目、試験問題、評価基準と水準などの課題設計を行った。

7. 試験の実施方法

1) 学生への事前周知

ソーシャルワーク実習履修の前年度11月にソーシャルワーク基礎実習指導（2年次の実習指導科目）において概要説明を行った。また、4月中・下旬にソーシャルワーク実習指導において詳細説明を行った。

事前周知にあたっては、実習コンピテンス・アセスメントでの自己理解や実習評価表で求められている能力に関する事前教育と共に、OSCEで必要とされる能力ならびに試験項目や合格基準と再チャレンジシステムを記した配布資料、各試験項目の目的・設定・物理的空間配置・試験時間・評価者体制等を記したインストラクション用紙、評価項目と評価段階を含んだ評価チェックリストと評価にあたってのポイントや項目の解釈をまとめた評価上のポイント、試験当日のスケジュールリスト、アセスメント報告に関わる事例集と模擬解答例を配布し説明を行った。さらに、昨年度OSCE場面を映像で鑑賞することにより、イメージ形成を図るとともに、演習で取り組んできた技術の再学習を促した。

2) 実施日

2014年6月3日（実習日誌は翌日8：45～9：30に提出）にOSCEを実施。CBT（6月10日実施）結果と併せて6月17日に結果返却し、追・再試験は6月24日に行った。

3) ブースと試験の流れ

本OSCEでは、ひとつの試験ユニットをブースと称する。先に示した各試験項目について、「インテーク面接」をAブース、「アセスメント報告」をBブース、「実習日誌記載・提出」をCブースとした。試験項目別にブースを設置し、A・Bブースは各5ブース、Cブースは2ブースの合計12ブースを全て別の教室に設置した。なお、教室は、A・Bブースを隣接した教室とし、控室2室を加えた全14教室を使用した。

試験の流れとしては、Aブース予定時間の30分前に控室に着席することとし、控室での留意事項確認の後、15

分前にAブース前の待機席に向かい、Aブース終了後はBブース前の待機席に着席。さらに、Bブース終了後にCブースへ移動してメモ取りを行い、メモ取り終了後に控室に戻るという流れとした。

4) 評価者体制と学生配置

評価者体制は、客観性を担保する観点と、事前事後の教育と連動させていくという観点から、インテーク面接（Aブース）、アセスメント報告（Bブース）は、内部評価者（教員）と外部評価者（実習指導経験者）との2名体制とした。さらに、インテーク面接のクライアント役評価者は、医療分野のOSCEでは模擬患者として研修を受けた一般市民などを当てるのが主流であるが、面接における相互作用を理解した評価とフィードバックの重要性を考慮し、外部の実習指導経験者に依頼した。さらに、実習日誌の評価はインテーク面接の内部評価者が担当した。これにより、インテーク面接・アセスメント報告の内部評価者10名、外部評価者10名、インテーク面接のクライアント役評価者5名の評価者体制となり、運営を担当したCブース担当者3名、控室送り出し及びアンケート担当3名を加え、合計31名体制で評価と運営を行った。なお、内部評価者と外部評価者による評価者ペアの組み合わせは、評価の平準化の観点から過去2年間の評価結果が、高得点の評価者と低得点の評価者による組み合わせとした。さらに、午前と午後でインテーク面接とアセスメント報告の役割を交代し担当した。

また、評価者間での評価基準の共通理解や、評価の平準化と運営方法の統一化を目的としたOSCE担当者打合せ会を行い、内部・外部評価者による事前リハーサルと模擬評価を実施した。

学生配置は、評価の公平性を図る目的から、実習指導担当教員、演習担当教員、実習施設・機関の外部評価者、2年次の実習施設・機関の外部評価者のブースに学生は配置しないこととした。さらに再試験は、本試験同様の設定とし、教員が評価にあたった。各試験項目（ブース）の評価者と学生配置は、本試験時の評価者と異なる教員が評価者となるよう配置した。

5) 試験項目と課題設計

各試験項目の目的、設定、試験時間、評価項目と評価、事例の概要等は以下の通りである。また、評価にあたっては、各評価項目に対応した評価上のポイントと、評価段階の判断基準を作成した。

(1) インテーク面接（Aブース）

インテーク面接は、クライアントを受け入れる態度から、基本的なコミュニケーションスキル、面接技法について確認するとともに、その面接がクライアントにとって有用なものであったかを確認することを目的とした。

設定としては、地域包括支援センターに「事前に電話

予約があった」クライアント役評価者とのインテーク面接を社会福祉士役の学生が実施する場面とした。さらに、電話予約の際に、氏名とともに「母の認知症の介護のことについて相談したい」という相談趣旨をクライアントが伝えていることとし、相談趣旨は当日控室で掲示した。

試験時間は8分（面接7分、要約1分）とし、終了後4分で評価者からフィードバック、学生退室後に3分で評価調整を行った。

評価にあたっては、評価チェックリスト（図Ⅰ）を用いて評価を行い、評価者による評価項目を22項目とし、各項目の評価段階は「3：適切（的確）である」「2：まあまあ適切（的確）である」「1：適切（的確）でない」の3段階評価の66点満点とした。

実習前評価システム OSCE 評価チェックリスト（Aブース：インテーク面接）

受験者： 学籍番号	氏名	
評価者： ①	②	
チェック項目	評価段階	評価上のポイント
1 CLを迎え入れる態度	3-2-1	言葉かけ・動作等の丁寧さ・自然さ
2 椅子の勧め方	3-2-1	言葉かけ・仕種・勧め方
3 対面の位置の取り方	3-2-1	どちらが先に座るか・座る位置取り
4 始めの挨拶と自己紹介	3-2-1	言葉・所属・職名・氏名・役割
5 面接への倫理的配慮	3-2-1	守秘義務の伝達・メモの丁承
6 主訴の聞き取りの質	3-2-1	面接開始の切り出し方
7 質問技法の的確さ	3-2-1	開かれた質問・閉ざされた質問
8 言語追跡の的確さ	3-2-1	相手の言葉・語りを丁寧に追う
9 語りの促進の的確さ	3-2-1	うながし（はげまし）・あいづち
10 反映技法の的確さ	3-2-1	感情の反映・（意味の反映）
11 確認技法の的確さ	3-2-1	言い換え・繰り返しの技法
12 焦点の当て方の的確さ	3-2-1	焦点の当て方・焦点の移動
13 身体技法の的確さ	3-2-1	傾聴の姿勢・手足の位置／動作
14 視線の的確さ	3-2-1	相手の目・凝視しない・きょろきょろしない
15 音声の調子の的確さ	3-2-1	明瞭さ・高さ・速さ・抑揚
16 沈黙への対応の的確さ	3-2-1	待てる・促せる・問いに変える
17 主訴の要約と確認の的確さ	3-2-1	主訴の内容把握・伝え方・確認の取り方
18 その他のチェックリスト		
○ 質問攻めではなかったか	3 なし―― 2 少し―― 1 あり	
○ ワーカー側が沈黙に陥らなかったか	3 なし―― 2 少し―― 1 あり	
○ 早すぎる指示・助言等ではなかったか	3 なし―― 2 少し―― 1 あり	
○ メモ取りに集中していなかったか	3 なし―― 2 少し―― 1 あり	
○ 不適切な表現はなかったか	3 なし―― 2 少し―― 1 あり	
【総評】		
評価者評価得点（2名の評価者の合議）	【	／66点】
クライアント評価者得点	【	／18点】
合 計 得 点	【	／84点】

評価段階： 3：適切（的確）である 2：まあまあ適切（的確） 1：適切（的確）でない
：自然で違和感なし、丁寧に実行されている。
：実行されているが、ぎくしゃくしている。
：使おうとしているが、的外れ、対応しなければならぬことをしていない。

＜図Ⅰ インテーク面接 評価チェックリスト＞

さらに、クライアント役評価項目（表Ⅰ）を6項目とし、「3：十分に—」「2：まあまあ十分に—」「1：そうとは言えない」の3段階評価の18点満点とした。

＜表Ⅰ インテーク面接 クライアント役評価項目＞

1	クライアントは、気持ちよく迎えられたか
2	クライアントは、ソーシャルワーカーの役割をよく理解できたか
3	クライアントは、滑らかに相談関係に入れたか
4	クライアントは、相談事を十分に聴かれたと感じられたか
5	クライアントは、相談事を十分に話したと感じられたか
6	クライアントは、相談事を十分に理解されたと感じられたか

ブースとしての評価は、評価者2名の合議による得点とクライアント評価者による得点を合計したものを評価得点とした。

クライアント役は、母の情報を統一した上で、評価者の実際の性別に併せて息子役ないし娘役とし、双方で大きく差異の生じない事例（A4各3頁）を作成した。

また、クライアント像を、相談への動機づけを有するクライアントとし、面接での自然な応答と共に沈黙を一回実施することを申し合わせた。さらに、クライアントからの感情表出を行うことや、学生が沈黙に陥った場合は、ある程度の時間がたった段階でクライアントから話を切り出すこと等、面接実施にあたって11項目の統一項目を設定した。あわせて、心情のポイントを事前打ち合わせで共有し、クライアント像の統一を図った。

（2）アセスメント報告（Bブース）

アセスメント報告は、得られた（与えられた）情報の整理・統合、主観的ニーズの把握、客観的ニーズ分析、現段階での不足情報、当面の援助目標、必要情報へのアクセス方法を指摘出来るかを確認するとともに口頭報告技術の適切さを確認することを目的とした。

設定としては、ある施設・機関のケースカンファレンスにおいて参加者（評価者）にソーシャルワーク実習生の立場からアセスメント報告を行う場面とした。この場面は、すでに行われたインテーク面接（利用者・家族）や関係機関からの情報収集を踏まえて行われる場面である。カンファレンスでは3事例（事前配布事例）が検討される予定で、事前にアセスメント報告の準備をしている3事例から、ブース内で一事例を指定し、指定された事例に関する追加情報を読んでアセスメント内容を整理（再アセスメント）の上、口頭でカンファレンス参加者（評価者）に対し、報告するという設定とした。

試験時間は9分（再アセスメント3分、報告6分）とし、終了後3分で評価者からフィードバック、学生退室後に3分で評価調整を行った。

評価にあたっては、評価チェックリスト（図Ⅱ）を用いて評価を行い、評価項目を20項目、評価段階はインテーク面接同様である3段階評価の合計60点満点とした。また、ブースとしての評価は、評価者2名の合議の上決定した得点を評価得点とした。

事例は、児童相談所、病院、地域包括支援センターの実習生が、実習指導者である社会福祉士の実践を観察体験していくことを想定した架空事例とした。さらに、事例を構成する場面には、他機関や他職種との連携場面、面接場面、実習スーパービジョン場面、事前学習で得ている情報等を盛り込み、概ね逐語録で作成した（一事例につきA4で7頁程度）。追加情報は、その後の実習体験場面を想定したA4半頁程度のものとした。

実施前評価システム OSCE 評価チェックリスト（Bブース：アセスメント報告）
受験者： 学籍番号 氏名
評価者： ① ②

チェック項目	評価段階	備考（評価上のメモ）
1 クライアントの基本情報	3-2-1	
2 本報告の主たるポイント	3-2-1	
3 クライアント像の把握（人の側面）		
①身体的・精神的側面	3-2-1	
②心理的・情緒的側面	3-2-1	
③社会的側面	3-2-1	
4 クライアント像の把握（環境の側面）		
①クライアントの環境	3-2-1	
②社会環境	3-2-1	
5 クライアントの主観的ニーズ把握	3-2-1	
6 客観的ニーズ判断：		
①問題把握	3-2-1	
②ストレングス	3-2-1	
③客観的ニーズ判断	3-2-1	
7 不足している情報の指摘	3-2-1	
8 当面の援助目標と必要情報へのアクセス		
①当面の援助目標	3-2-1	
②必要情報へのアクセス	3-2-1	
9 口頭報告技術の適切さ：		
①報告の切り出し方	3-2-1	
②報告のメリハリ	3-2-1	
③終了の仕方	3-2-1	
④適切な表現方法	3-2-1	
⑤音声の調子の確さ	3-2-1	
⑥全体的なまとまり	3-2-1	
【総評】		
評価得点【 / 60点】		

評価段階 3：適切である；要点をとらえ、的確にアセスメントし、口頭説明が適切である。
2：まあまあ適切；要点をおさえているものの、部分的に的確さを欠いている。
口頭説明に不適切なところがある。
1：適切ではない；要点がおさえられていない、的外れなアセスメント内容である。

<図Ⅱ アセスメント報告 評価チェックリスト>

（3）実習日誌記載・提出（Cブース）

実習日誌記載・提出は、一連の流れに取り組む実習態度、情報記録力と実習日誌記載能力を適切に有しているかを確認することを目的とした。

設定としては、地域包括支援センターの実習生が、メモの取れない面接体験（Aブースを想定）を行い、さらに別の実習体験を終えたのちにメモを取り、帰宅後に実習日誌を記載し、翌朝に提出するという設定とした。

試験時間は、Aブース、Bブース終了後にCブースにおいて、メモを取る時間として10分設けるが、実習日誌記載時間には制限を設けないこととし、帰宅後に実習日誌を記載の上で、翌日8：45～9：30に提出することとした。

評価にあたっては、評価チェックリスト（図Ⅲ）を用い評価を行い、評価項目を10項目、評価段階は「1：行っている」「0：行っていない」の2段階評価の10点満点とした。この評価は、Aブース内部評価者が担当し、外部評価者には実習日誌への記載方法を中心としたコメントを依頼し、後日演習教材として取り扱った。

6）合格基準と評価段階の考え方

合格基準は、「6割以上（3ブース合計点が総得点の6割以上）」とした。これは、実習前に実習遂行能力を測るOSCEでは「6割」の技術が備わっていれば、的確と判断するという考え方である。さらに、学生の技術水準に対しては、OSCE後の振り返り学習や実習体験を通

受験者： 学籍番号 _____ 氏名 _____
 評価者： ① _____

チェック項目	評価段階	備考 (評価上のメモ)
1 実習日誌は指定日時に提出されたか		※本項目は必須
2 必要事項の記載		
①氏名	1 — 0	
②日付・曜日・時間	1 — 0	
③本日の重点目標	1 — 0	
④日課表	1 — 0	
3 実習日誌記載内容		
①体験場面を表す見出しがつけられているか	1 — 0	
②事実 (場面・事柄) の記載	1 — 0	
③事実に対する解釈・分析・感想の記載	1 — 0	
④個人情報保護やプライバシーへの配慮	1 — 0	
4 記載方法		
①ボールペン・万年筆で記載されているか	1 — 0	
②修正が適切に行われているか	1 — 0	

※指定期日・方法での提出が為されない場合は評価が出来ない為、OSCE 試験不合格とする。

【総評】

評価得点【 / 10 点】

評価段階 1：行っている；指定項目について行われている
 0：行っていない；指定された評価項目について記載されていないまたは行われていない。(複数の項目を含む場合、全て記載されていなければ、「0」)

<図Ⅲ 実習日誌記載・提出 評価チェックリスト>

じて、より高まることを期待し、最終的に10割を目指すものとした。

一方で、実習前・実習中・実習後で個別評価項目の水準は同一のものであり各時期の「3：適切 (的確) である」の評価水準は同一のものとなる。つまりは、実習前に有するべき水準は、全体の評価得点・割合で評価し、個別の評価項目での「適切さ」は、試験時期によって変化するものではないものとした。

7) OSCE結果の情報開示

OSCEの結果は、評価チェックリストとOSCE場面の映像を録画したDVDを学生に返却するとともに、実習指導者へも同様の方法で情報開示し、実習遂行能力を有していることと技術習得状況を伝え、実習プログラム作成に役立てるよう要請した。

8. 学生アンケート調査

1) 対象と方法

OSCEを受験した学生に対し、インテーク面接及びアセスメント報告に関する設問は6月3日の試験終了後の控室で無記名の質問紙による回答を求め、実習日誌記載・提出及びOSCE全般に関する設問は、OSCEの翌週となる6月10日のCBT終了後にコンピューター入力による調査を行った。

2) 倫理的配慮

アンケートは無記名であること、統計的处理を施し個

人が特定されないこと、研究目的以外に使用されないこと、試験結果及びアンケート調査結果のデータに関して学生の任意で諾否できること、研究に協力しないことでの一切の不利益は生じないことなどを記述した紙面と口頭で説明し倫理的配慮を行った。

3) 調査内容

OSCEの形式で技術が測られることの有効性、試験結果予測、事前学習状況、各試験項目 (プース) の試験問題、試験時間、評価項目、インストラクション用紙の指示内容の適切さについて調査を行った。各々の調査項目に対して4件法による回答と、OSCEに際してどのような事前学習を行ったか、OSCE (技術試験) で測られると良いと思われるスキル、OSCE (技術試験) に関する意見や改善点、各試験項目 (プース) に関する意見 (改善点も含めて) に対する自由記述項目を設定した。

9. 結果

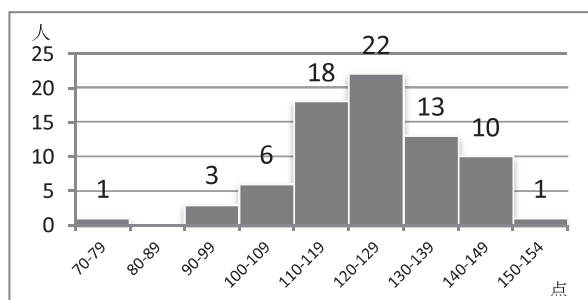
1) OSCEの結果

(1) OSCEの結果概要

OSCE受験者75名のうち、74名が本試験を受験した (体調不良で欠席した学生1名は追試験対象とした)。

OSCEの結果としては、154点満点のところ、平均点が123.9点 (得点率80.4%)、最高点は151点、最低点は70点であった。得点分布は図Ⅳの通りであるが、120～129点が最も多く、合格点93点を下回った者が2名となった。基準に満たない学生は、再学習の上で再試験を実施した。

追再試験では、追試験対象学生は合格。再試験対象学生2名のうち1名は合格、1名は不合格のため実習配属中止となった。



<図Ⅳ OSCE総得点ヒストグラム (n=74) >

(2) 各試験項目の結果

各試験項目の結果としては、インテーク面接では、84点満点のところ、平均点が66.7点、最高点83点、最低点43点であった。また、アセスメント報告では、60点満点のところ、平均点が48.6点、最高点59点、最低点25点で

あった。さらに、実習日誌記載・提出では、全ての学生が実習日誌を提出した。評価得点は10点満点のところ、平均点が8.6点、最高点が10点、最低点が2点であった。試験項目別平均点・得点率（表Ⅱ）は、実習日誌記載・提出が最も高く、インテーク面接が最も低い結果となった。

＜表Ⅱ 試験項目別平均点・得点率（n=74）＞

試験項目	満 点	平均点	得点率
インテーク面接	84点	66.7点	79.4%
アセスメント報告	60点	48.6点	81.0%
実習日誌記載・提出	10点	8.6点	86.0%

（3）評価・運営結果

客観的評価を行うために、内部評価者と外部評価者の間で、評価の異なる点について評価調整を行った。この評価調整の中には、3分の時間での調整では終了せず、休憩時間も含め調整が行われる事例もあった。

一方、運営に関しては、フィードバックや評価調整に時間を要し、時間のズレが生じる部分があったが、途中の休憩時間に時間調整を行うことで概ね予定通りに実施された。

2）学生アンケート調査結果

受験者75名のうち、本試験当日欠席した学生1名を除く74名に対し行った。

○インテーク面接（Aブース）、アセスメント報告（Bブース）

回収数：74名（回収率：100%）

有効回答：73名（有効回答率：98.6%）

○実習日誌記載・提出（Cブース）、OSCE全般

回収数：74名（回収率：100%）

有効回答：74名（有効回答率：100%）

本研究では、OSCEの目的理解と有効性、OSCEの課題設計に関して、以下に整理しまとめることとする。

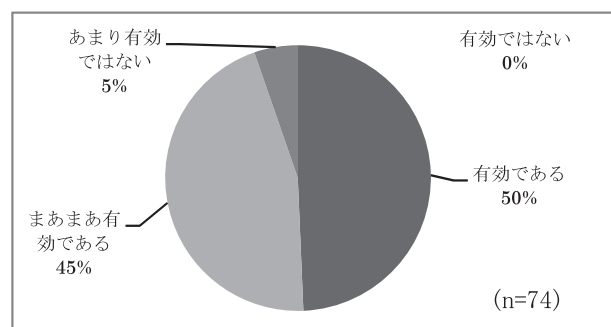
（1）OSCEの目的理解と有効性

OSCEの目的理解に関する「OSCEの目的について、理解できましたか」という問いに対し、「理解できた」と回答したのが53.6%、「まあまあ理解できた」と回答したのが39.3%であり、92.9%の学生が概ね理解出来たと回答した。

OSCEの有効性に関する「OSCEの形式でスキルが測られるのは、有効であると思いますか」という問いに対し、「有効である」と回答したのが50.0%、「まあまあ有効である」と回答したのが45.0%であり、95%の学生が概ね有効であると回答していた。つまり、9割以上の学生がOSCEの目的を理解した上で試験に臨んでおり、OSCEの形式でスキルが測られることを有効であると肯

定的に捉えていた。

また、自由記述では、「非常に緊張したが良い経験となった」、「頭でわかっているけど行動に出なければ意味がないので、そういう意味では自分の実力を確認できる素晴らしい機会だと思います」といった記述から、OSCEが緊張感を伴う試験であるものの、そうした環境下において自らがどの程度行動できるものかを知る機会ともなったことが窺えた。その一方で、「評価する先生によって、評価基準が異なるときがあるので統一してほしい。厳しい先生にあたると不利という状況は、学生間でフェアじゃない」という評価者間による評価の違いへの懸念に関する記述もみられた。



＜図V OSCEの形式でスキルが測られるのは有効であるか＞

（2）OSCEの課題設計

各試験項目の試験問題、試験時間、評価チェックリストの評価項目、インストラクション用紙による指示内容の適切さは、図Ⅵのようにすべての項目で7割以上から「適切であった」「まあまあ適切であった」との回答が得られた。特に、これらの回答の中で「適切であった」が70%を上回った項目は、インテーク面接の試験問題で77.2%、評価項目で86.0%、アセスメント報告の試験問題で71.9%、評価項目で73.7%の4項目であった。自由記述にはこれらに関する直接的な記述はなかったが、「外部の人がクライアントを行うことは現実的で実践的でとても良いと思います」「フィードバックで外部の方と先生のコメントがとても励みになりました」といった(外部)評価者による評価項目に基づくフィードバックを肯定的に捉える記述が目立った。

一方で、「適切であった」が50%を下回った項目は、アセスメント報告の試験時間で43.9%、実習日誌記載・提出の試験課題で33.8%、評価項目で45.8%と3項目であった。また、「適切とはいえない」「あまり適切とはいえない」の合計が20%を上回った項目は、インテーク面接の試験時間で28.1%、アセスメント報告の試験時間で22.8%と2項目であった。

これらの項目の自由記述によると、インテーク面接で

は、「とても緊張した」「時間があればもっとできた」「面接時間が短く感じた」とした記述がみられた。さらに、アセスメント報告では、「想像より追加情報の記載に手間取り、苦戦しました」「再アセスメントするのに3分間は難しい」「もう少しゆっくり読めれば良かった」といった記述がみられた。

また、実習日誌記載・提出に関する自由記述では、「日誌の記載方法について体験的に書くことが出来た」などの概ね肯定的な意見が多かったが、「Bブースも記載すると良いのではないか」といった記載対象範囲の拡大に関する記述、「Aブースで8分の体験のみで5頁の日誌用紙が配布され分量が多く感じた」、「インストラクション用紙や評価項目に記載量についての説明が必要ではないか」といった日誌の記載量についての記述、「もっと評価項目を多くして点数を高くしてはどうか」といった評価項目の拡大に関する記述がみられた。

10. 考察

本研究では、相談援助実習におけるOSCEを開発し、その実施結果と学生アンケート調査結果を踏まえ、より効果的なOSCEを開発する上での検討課題を明らかにすることを目的とした。

1) OSCE開発における成果

OSCE開発により、相談援助実習の到達目標となる評価表に含まれる技術・技能が、どのような項目から構成されているのか、実習前に必要である技術水準とはどのようなものかについて、一定の基準を明らかにすることが出来た点は大きな成果である。この基準を明確に示したことで、実習前に到達すべき技術を学生や実習施設・機関に示すとともに、教員・実習指導者・学生の実習関

係三者で確認することを可能とした。

また、9割以上の学生がOSCEの目的を理解した上で試験に臨み、OSCEの形式でスキルが測られることを有効であると肯定的に捉えていることから、学生が自身の「実力」を確認するというスクリーニング機能に留まらない、学習意欲を高める教育方法としての活用の可能性も示唆された。

2) OSCE開発にあたっての検討課題

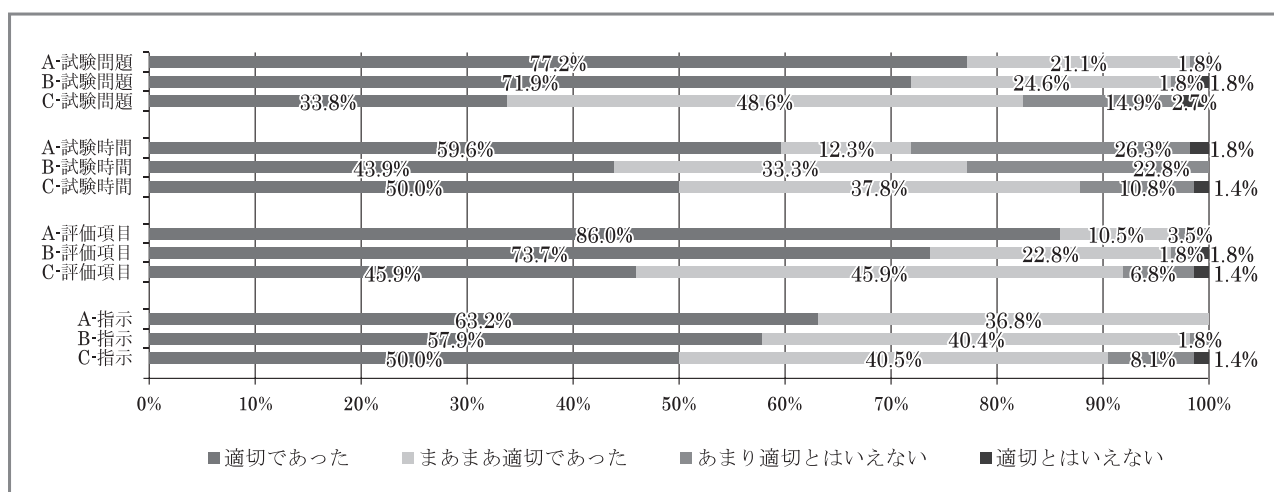
(1) OSCEの難易度

OSCEの得点率は、80.4% (平均点123.9点/154点) であった。昨年度とは、評価基準・水準の見直し、実習日誌記載・提出の追加等の内容変更を行っており単純には比較できないものの、昨年度OSCEの得点率である77.9% (平均点109.9点/141点) を上回る結果となった。課題別の得点率は、インテーク面接が79.4%、アセスメント報告が81.0%、実習日誌記載・提出が86.0%であり、多くの学生にとって、合格基準6割を超えることは可能な難易度であった。

相談援助実習におけるOSCEの難易度は、臨床参加型実習の実施に向けたスクリーニング機能としての難易度として検討されることが必要であり、今後臨床参加型実習の実施状況や、臨床参加型実習実施にあたっての実習遂行能力の検討と併せてOSCEの難易度の検討を行っていく必要がある。

(2) 試験項目

本OSCEは、久能ら(2009)や北海道ブロック(2011)における先行事例における試験項目に改良を加え、さらに事例開発を行うとともに、「実習日誌記載・提出」を加えた3つの試験項目(ブース)で実施した。先行分野である医療分野でのOSCEでは10ブース程度の試験項目が実施されている。実践力養成が志向される社会福祉士



＜図Ⅵ 試験問題・試験時間・評価項目・指示内容の適切さ＞

養成教育において、臨床参加型実習を実施する為にどの程度の試験項目が必要かは、今後の検討課題である。

試験項目の開発にあたっては、演習教育を始めとした事前教育で教授されていることが条件であり、事前教育とのすり合せの中で開発される必要がある。

（３）課題設計

各試験項目の試験時間や試験問題などについて学生アンケート調査結果では、すべての項目で7割以上の学生から「適切」「まあまあ適切」との回答を得た。これは、事前に試験項目毎の目的や設定、評価項目と評価上のポイント、指示内容を明示したことで、学生自身が事前に取り組むことが出来、不明な点があれば事前に確認することが出来たことによるものであろう。このような事前学習が可能な課題設計がOSCE開発においては重要なポイントである。

さらに、今後のより効果的なOSCEを開発するにあたって、ここでは、「適切である」が50%以下の項目と、「適切でない」「あまり適切でない」を合計した「(あまり)適切ではない」が20%以上となった項目を中心に各々の試験項目について検討することとする。

まず、インテーク面接であるが、試験時間については、28.1%が「(あまり)適切ではない」としているものの、試験問題や評価項目では、概ね適切としていた。これは、「面接時間が短く感じた」「とても緊張した」という自由記述に代表されるように、緊張を伴う中で初めて出会うクライアントに対応することが求められるインテーク面接の試験特性による結果と考えられるであろう。

さらに、アセスメント報告は、試験時間について「(あまり)適切ではない」が22.8%、「適切である」も43.9%であった。情報の整理・統合・分析などを求めるアセスメント報告の試験時間は、事例に含むべき課題や情報量と直結するものである。今回の事例は、疾患名や医師-患者関係などの特定の分野に関する知識や、機関の機能に関する情報は事例情報に盛り込み、特定の分野に関する詳細な知識がなくとも取り組めることを意図し事例を作成した。これにより情報量が多くなり、試験時間に比して事例の分量が多いと受け止められたと考えられる。一方で、試験問題や評価項目について、概ね適切としており、事例に含んだ内容や形式は、概ね適切と評価していたと言えよう。今後は、特定の分野に関する知識量の考え方は維持しつつ、事例に含むべき課題や情報量の検討が必要である。

最後に、実習日誌記載・提出であるが、試験問題について「適切である」との回答は33.8%、評価項目は45.9%であった。自由記述では記載量の指示についての記述が目立った。その一方で、指示内容については、「適切で

ある」50.0%、「まあまあ適切である」40.5%と、9割以上の学生が「(まあまあ)適切」としていることや、試験項目としては最も高い得点率であったことから、単に指示内容の問題だけではなく、実習日誌を記載することそのものに苦慮したという結果とも考えられる。今後は、実習日誌記載能力についての事前教育の検討を行うことが必要である。さらに、今回評価対象としていなかった記載内容の「適切さ」に関する評価項目の開発も検討課題である。

（４）評価者体制と評価

評価の客観性を担保する上で、内部評価者と外部評価者が一緒に評価を行ったことは極めて重要であった。事前打合せにおいて、評価基準・水準について共通理解の上で模擬評価を行い、さらに異なる評価点について全体討議することで、評価基準・水準の共通認識を深めていった。また、OSCE評価にあたって、個別項目での評価の違いに対して合議することで「適切さ」を判断することが出来た。これは、評価者を複数体制にしたことと共に、外部評価者が入ったことによる効果でもあり、今後も内部・外部評価者のペアで実施していくことが望まれる。

また、本研究で開発したOSCEでも導入した、全ての試験項目による総合評価や、再試験と本試験における異なる評価者設定など、OSCEの仕組み全体で信頼性を担保する方策の継続も必要である。

一方で、自由記述にもあった「評価者間による評価の差異への懸念」は重要な課題である。ブース間の評価の差異は、本OSCE結果から明確に論ずることは困難であるが、ブース内評価者の合議により評価調整を行った過程から、ブース間での評価に差異が生じる可能性は否定できない。今後は、評価者間による評価の差異に関する検証を行うとともに、評価の平準化に向けた評価者の継続研修の充実が必要である。

さらに、こうした評価者体制を継続的に維持していく為には、外部評価者などの継続的人員確保も重要な検討課題である。

11. 謝辞

本研究に参加協力していただいた皆様、調査に快く回答いただいた学生の皆様に心より感謝の意を表します。

なお、本研究は、JSPS科研費（挑戦的萌芽研究）26590114の助成を受けた研究の一部として実施したものである。

引用文献

阿部和厚, 森寿子, 太田勲, 他 (2005)『言語聴覚士養成教育OSCE実施マニュアル』北海道医療大学心理科学部言語聴覚療学科
北海道ブロック社会福祉実習研究協議会 (2011)『資料集 北海道のソーシャルワーク実習』115-173
久能由弥, 池田雅子, 伊藤新一郎, 他 (2009)「北星学園大学における実習前評価システムの試行結果について (2) -OSCEの可能性と課題-」『2009年度北海道ブロック研究協議会報告書』86-92
社団法人日本社会福祉士養成校協会 (2009)『相談援助実習指導・現場実習 教員テキスト』中央法規
渡辺央 (2013)「相談援助実習の実習前評価についての実態」『東京成徳大学研究紀要-人文学部・応用心理学部-』20, 165-172

参考文献

阿部好恵 (2014)「社会福祉士養成教育における実習前

評価システムの取り組み (Ⅱ)」『帯広大谷短期大学紀要』51, 27-34

伴信太郎, 津田司, 田坂佳千 (1994)「OSCEによる『臨床入門』実習の評価」『医学教育』25 (6), 327-335

伴信太郎 (1995)「客観的臨床能力試験-臨床能力の新しい評価法-」『医学教育』26 (3), 157-163

半谷眞七子, 松葉和久, 松井俊和 (2005)「薬学生の臨床コミュニケーション教育の評価としての客観的臨床試験 (OSCE) の試みとその評価」『医療薬学』31 (8), 606-619

厚生労働省社会保障審議会福祉部会 (2006)『介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見』

齋藤勲, 真下順一, 佐々木圭子, 他 (2008)「客観的臨床能力試験 (OSCE) 試行に向けた準備とOSCEの副次的効果: 評価者アンケートと受験者アンケートから」『医療薬学』34 (8), 805-810

山路雄彦, 渡邊純, 浅川康吉 (2004)「理学療法教育における客観的臨床能力試験 (OSCE) の開発と試行」『理学療法学』31 (6), 348-356

Development of OSCE for Field Work of Social Work -Through the result of OSCE and questionnaire to students-

Yasuhiro MAKI Akina KAWAWA Maki FUKUMA
Naoya KONDOU Yosie OOTOMO Yukio SUZUKI

Abstract : The purpose of this study was to develop an effective Objective Structured Clinical Examination (OSCE) for field work of social work. OSCE contains 3 booths : intake interview (A booth), assessment report (B booth), and training diary (C booth). Acceptance criteria was 60% of the total score.

75 students who were going to their field work of social work took OSCE. The score average was 123.9 points (80.4 %) and 74 students achieved the acceptance criteria. The result of questionnaire to the students showed that the students understood the purpose of OSCE and considered OSCE effective for assessing their skills.

The result of this study clarified the required skill criterion as well as their acceptance level for field work of social work. It also suggested that OSCE has not only a screening function, but also a possible educational tool to enhance students' learning motivation. Furthermore, the result indicated some issues to consider such as test difficulty, test items, subject design and the matter of evaluation in order for OSCE to be more effective.

Key Words : Objective Structured Clinical Examination (OSCE) , Field Work of Social Work, Pre-training assessment system, Competence, Certified Social Workers training education.